

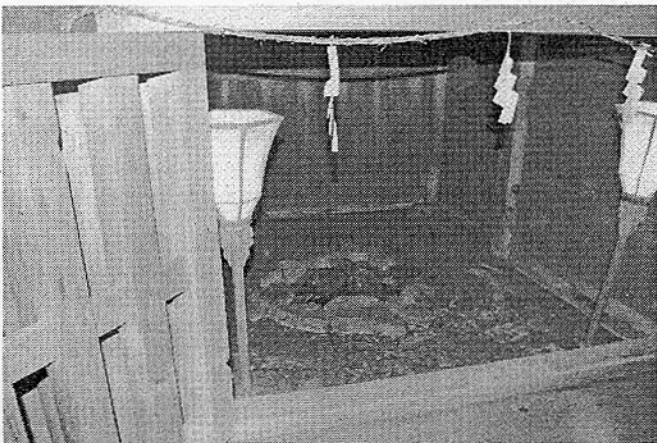
# びわこの 考湖学

—第2部—

29

今回は、延暦寺の守り神でもある「日吉大社」と琵琶湖、そして水との関係について紹介します。

日吉大社は、日枝神社とも呼ばれるように、もとは、比叡山を神体山とする神社です。延暦寺が開かれてからはその守護神として発展し、全国に3800余りの末社を数える、日本を代表する神社として、いまなお、厚い崇敬を集めています。



日吉大社の境内には上七社、中七社、下七社の山王二十一社を始めとする、多くの神々が祀られています。これらの神々は、2つのグループに分けることができます。上七社を例にとれば、大津への遷都の際に三輪山から迎えた大己貴命を祀る西本宮を中心とする、宇佐宮、白山姫神社の西本宮グループと、古事記に「この神は淡海国の日枝山に坐す」と記されている大山咋神を祀る東本宮を中心とし、三宮、牛尾神社、樹下神社の東本宮グループ四社です。西本宮グループは、他所から勧請された神々であり、東本宮グループは、比叡山坂本の在地の神々たちです。ここで、第13話の謡曲白鬚の話と、第25話の琵琶湖から出現する薬師如来の話

## 水の社「日吉大社」

樹木神社の境内

—平成22年元日



を思い出してください。白鬚には、巡り来て、比叡山を仏教の聖地にしよとす積迎と、この地を積迎に提供しようとする琵琶湖の主である薬師如来が登場します。このことを象徴するように、外来の神を祀る西本宮の本地仏（日本の神は、仏教の仏の仮の姿であるという本地垂迹説に基づき、神に与えた仏の名称）は釈迦如来であり、東本宮の本地仏は薬師如来なのです。ここにも、見事に、在来の水の神を外來の仏教が薬師如来

として取り込んでいった過程が読み取れます。

さて、このように複雑な構成を持つ日吉大社ですが、その社殿構成にも、他にあまり例を見ない特徴があります。まず、在地の神々を祀る東本宮を見てみましょう。東本宮本殿の後ろには、大山咋神の父神とも言われる大年神を祀る大物忌神社があり、この背面の山裾から大行事水（大物忌神社の旧称）と呼ばれる、清冽な清水が湧き出ています。大物忌神社本殿の周囲をよく観察すると、かつては、この大行事水を本殿の周囲に切られた石敷きの溝に引き込み、本殿を一周させていたことがわかります。大物忌神社を一周した水は一段下の東本宮に至り、本殿を一周した後、途中で「亀の井」と呼ばれる井戸の水を合わせ、下段にある樹下神社本殿に向かいます。樹下神社本殿の床下には「霊泉」と呼ばれる井戸があり、ここからあふれ出た水は、東本宮から流れてきた水と合わさり、樹下神社本殿を一周した後、比叡山から流れる大宮川に流れ込みます。

一方、西本宮では、大宮川を堰き止めて分流させた水を境内に引き込み、西本宮本殿を一周させ、さらに下段にある宇佐宮の本殿を一周させ、さらにその下段にある白山姫神社の本殿を一周させ、大宮川に流し込みます。本殿の周囲に巡らされたこれらの溝は、いずれの拝殿にもないことから、明らかに雨落ちの溝ではなく、水が本殿を一周することを意図していることがわかります。このことは何を意味しているのでしょうか？

地から湧き出る大行事水や霊泉の水。霊山比叡山から流れる大宮川の水。いずれも神聖この上ない水を、さらに、上七社の神々が清め、そして人々の住まう里に送り、さらに、水の神が住まう琵琶湖に返す。このような、水への信仰と祈りの神々により構成されているのが、日吉大社なのです。

比叡山、日吉大社。荘厳にして美しいこれらの景観の根底には、水に対する敬虔な祈りが流れているのです。

（財団法人滋賀県文化財保護協会 大沼芳幸）

## 清らかな祈りの循環